

京都美術の歴史学—京都芸大の 1950 年代

2021 年度活動報告

本研究では、戦後の占領期・復興期の京都における本学彫刻専攻及びデザイン専攻の教育について、菊川と牧田が調査を行っている。新型コロナウイルスの感染拡大にともない、今年度も各自が近郊で行える実地調査が中心となった。対策を講じ菊川と牧田の協同で聞き取り調査を検討していたが、コロナ禍終息の見込みが立たずやむなく延期とした。

菊川は昨年度に引き続き、本学彫刻科教員の堀内正和と辻晉堂を戦後いち早く紹介した、神奈川県立近代美術館の草創期（1951- 1961）における展覧会活動の背景について、関係資料から調査を行った。この成果の一部は『開館 70 周年記念 空間の中のフォルム—アルベルト・ジャコメッティから桑山忠明まで』展報告書に掲載した拙論で発表した（神奈川県立近代美術館、2021 年、69-72 頁）。近代美術館は当時の副館長・土方定一の先導のもと、展覧会を通して官展を中心とする戦前の美術史を訂正し、埋没した作家に光を当てることを指針とし、1951 年の開館記念展には堀内の師・藤川勇造の個展を開催した。藤川はロダンに学び帰国後は二科彫刻部を設立したが、1935 年の帝展改組の渦中で急逝。同館は 1963 年に堀内の個展を開催し、藤川を介したロダンの系譜が日本に根付きやがて抽象表現を育んでいくという文脈が形作られた。なお兄弟子の菊池一雄は、堀内に先んじ本学彫刻科で 1947 年から 7 年間教鞭を執り、その後東京藝術大学へ赴任した。敗戦を経て美術界と作品の評価軸が再編されるなか、中央と地方の位置づけも変化していく。このとき京都という都市が担った役割について、次年度はこれまでの調査をもとに整理していく。

牧田は今年度も上野リチの教育者としての活動について研究を進めた。昨年と同様にコロナで海外渡航困難のため、ウィーンでの実地調査は来年度以降に回さざるを得なかったが、これまで『COMPOST VOL.1』の研究ノートその他にまとめた戦前の国内での彼女の活動の報告は、他のリチ研究の主要参考文献とされるなど一定の成果が得られた。本年度は、特に本校でしか調査できないリチの戦後の教育に関して重点的に研究を進めた。『百年史』など本校の各種記念号や『美』など各種研究会誌、あるいは彼女に学んだ柳原良平や木村英輝その他卒業生の著作からリチの足跡を探り、彼女の本校でのデザイン教育の理念や授業方針を確認、その影響を詳しく調査した。またリチのウィーン工房流の教育の立ち位置を同時代の状況を把握することで具体的に検証した。今回は特に、ビジュアルデザイン研究室で保管されていたガラス工芸習作の中にリチ在職中のものが見つかり、その詳細な調査を試みることができた。

この資料の一つ目のグループ 19 作品は、調査により 1965 年卒業の工芸科デザイン専攻の 2 回生の時の課題制作と特定できた。日生劇場「アクトレス」壁画を手伝った細見保彦の作品も確認することができ、リチとの関係が濃いものとわかった。二つ目のグループ 25 作品は、1980 年工芸科デザイン専攻卒業生の 2 回生の時の課題作品とわかり、1963 年のリチ退官後も彼女の教育方針が確かに受け継がれていることがよくわかる資料であった。これらを中心に、リチの教育理念を直に受け止めた卒業生諸氏からその存在を具体的に語っていただき、今も受け継いでおられる現職教授へと教育が繋っていった経緯を明らかにする機会を実現したい。これらを組み入れて来年度には教育者としての上野リチを論文としてまとめる予定である。

以上二つの研究テーマに基づき、今年度末には本学卒業生やこれまで聞き取りを実施した関係者を招聘し、研究会の実施を検討している。

菊川亜騎（芸術資源研究センター客員研究員）



ビジュアルデザイン科に残されていたリチ教室の学生作品



調査状況